

永久保存版

Mild Vind

ミルヴィン

2025.12

Nr. 4

やさしい風を届ける T E N A ニュースレター



明日につながるやさしさ



TENAを導入いただいている施設様

vol.5

きのこグループ 社会福祉法人新生寿会
特別養護老人ホーム きのこ荘様

入居者様もご家族も、スタッフや地域にも 良質なケアがもたらす安心とやりがい

全室洗面所とトイレ付きの個室ユニットで、入居者様一人ひとりに寄り添うケアを提供、地域との交流にも力を入れているきのこ荘様。認知症があっても、体が不自由でも「たったひとつの人生のあたりまえの生活」を実現するための取り組みをうかがいました。

DATA

住所：岡山県井原市木之子町2416番地1
URL: https://kinoko-group.jp/facility/o_kinoko-sou/
病床数：完全個室100床
(1ユニット10人)



大好きな球団の試合観戦を実現（左）。
地域のかかし祭りでも入居者様が活躍されます（右）

認知症治療と専門ケアを トータルに展開するパイオニア

誰もが穏やかに過ごせる居場所を

日本初の認知症専門病院「きのこエスポアール病院」を中心に、岡山県と東京都内で認知症ケア事業を展開するきのこグループ。入居者様一人ひとりの「あたりまえの生活」を支えるという理念のもと、認知症ケアに取り組んでいます。

1981年に開設された特別養護老

人ホーム「きのこ荘」様は、グループで最も歴史ある施設です。2020年には、ここで暮らす方々が、入居以前の日々とのつながりを感じながら過ごせるようにと全室洗面所とトイレ付きの個室ユニット型に改築。個室で好きな音楽を聞き、見たいテレビを見たり、スタッフや周囲の方々とおしゃべりに花を咲かせたり、好みの食事をつたり。ときには外出の機会も設けるなど、一人ひとりの想いに寄り添う個別ケアを実現しております。

快・不快に敏感になる認知症 排泄ケアが大きなポイント

きのこ荘様は20年前にTENAを導入されました。認知症のある方は「快」と「不快」の感覚が鋭くなります。だからこそ、おむつなど身につけるものが快適であることはとても重要という考えからTENAを選択されました。導入以前のコンチネンスケアについて、施設長の原田まゆみさんは振り返ります。

「漏れを防ごうと、3、4枚の布おむつを重ねづけすることもありました。おむつ内の不快感をなんとかしたいという切実な気持ちから排泄後に手を入れてしまったり、おむつを外そうとしたりすることもしばしば。介護者もその対応に追われる日々でした」

言葉にできなくても 表情が変わる 良質なケアが変えていく

おむつ替えのストレス軽減が
生活全体の好循環をもたらす

ご自身の気持ちをうまく言葉にできない方でも、TENAの導入によっておむつの不快さが劇的に軽減され、穏やかに過ごせるようになったという原田施設長。

「ご家族から『落ち着いた様子が見えてうれしい』といった言葉をいただくこともあります。入居者様が安心して過ごせるようになった理由のひとつに良質なコンチネンスケアがあるのは間違いないと思います」

TENAの導入でスタッフの作業負担も大きく減りました。おむつの交換回数が明らかに減り、1回の交換にかかる労力も大きく減りました。

ユニットリーダーの高橋三恵子さんは

「布おむつからTENAに変更する際、なんてスリムなんだ！」と感動しながらも、本当にこれ1枚で大丈夫？という気持ちもありました。ところが実際に使ってみると、明け方のおむつ交換がいなくなりました。すると夜しっかり寝られるようになり、昼間は起きていられる。これを使っていけば、より快適な生活を実現できると実感しました」

認知症のある方は不安感への感受性が強く、長時間同じ姿勢でいることが難しい傾向にあります。「だからこそTENAのように手早く交換できることが大事。TENAを導入してからは、ベッドの上でもトイレでもスムーズに迅速に交換できるようになりました。外出時には公衆の多目的トイレで交換することが出来るほど製品がうまく設計されています」(高橋さん)。

当たり前だから大切なこと よいケアは適切な アセスメントから

サイズもタイプも豊富なTENA 見直しながら常にベターを探る

きのご仕様では、ご家族や入居前にいた施設からの申し送りなどを起点にアセスメントを行います。

介護主任の原田真輔さんは「生活環境が変わると、新しい場所にあわせて1日の生活リズムが徐々に整っていきます。その方に合ったケアを実現するため、入居直後から行動はもちろん仕草や表情なども含めてしっかりと観察し、ご本人の思いを汲み取りながら柔軟に対応していくことを心がけています」

排泄については、入居後1週間ほど尿測をして、排泄のタイミングや時間ごとの量を記録します。「結果をユニット内で



入居者様の自宅を訪問するカンファレンス。
ご自宅での様子を知る機会になっています

共有し、入居者様の自立度や生活スタイルに照らし合わせて、ご本人に一番合うTENA製品やおむつ交換タイミングを選定し、シールカードに記録します。おむつは一度決めたらそのままでなく、排泄リズムやおむつ内の状態の変化を観察、確認しながら柔軟な対応を心がけ、より快適な生活の実現に向けて常に改善しています。そのため、シールカードの内容も頻繁に更新しています」(原田さん)。

「漏れがあれば情報を共有して、どの製品を使い、どんなタイミングで交換すれば改善できるかをユニットで話し合います。起床時に交換する人、就寝前に交換する人、日中はTENAコンフォートで、夜間はTENAフレックスなど、タイ

ミングも合う製品も皆さん違います。また排泄に失敗しても、それはより良い形の実現に向けた「学び」ととらえています。せっかくTENAを使っているのだから、交換回数は最低限にして、その労力や時間を入居者様と過ごしたり、他の作業に使ったりしたいと考えています」(高橋さん)。

尿漏れなどの失敗を恐れずに、一人ひとりに合った形を模索し続けることは、一見、労力が増えそうに感じます。しかし実際は、適したTENAを使用することでおむつ交換にかかる作業負担や、使用するおむつの枚数が減り、おむつの費用も軽減しています。利用者様の快適とQOL(生活の質)の向上が、スタッ

すべての入居者様が 安心して暮らせる環境を 守るために

余裕のある人員配置で実現する
穏やかな雰囲気、心地よい音環境

グループの理念を実現するうえで、きのご仕様が大切に行っていることは「一緒に生活する」ケアです。入居者様の声を聞き、暮らしに寄り添い、思いを理解すること。入居者様が自分の居場所と感ぜられる雰囲気の中で、スタッフと共に過ごし安心して暮らす存在として認識し、ゆつくりおしゃべりする時間もケアの一環と考えておられます。

その方針を実現するため、スタッフ1人に対して入居者様1.5人という手厚い人員配置をとっています。スタッフが作業に追われて、常にせわしく動き回ったり、遠くから大声で連絡や指示の声飛び交ったりしては、入居者様が心穏やかに過ごせる環境とはいえません。スタッフも心穏やかに、入居者様の隣に座って話を聞き、一緒に過ごす時間を楽しむ余裕を確保することで、入居者様が落ち着ける、安心できる居場所づくりを実現しています。

認知症という症状ではなく その方自身を見る大切さ

きのご仕様では、認知症を「病気」とは捉えていません。ご本人がこれまで歩んできた人生と同様、これからの生活も変わりなく尊いもの。一人ひとりの人生を見守り支えることを何より大切にしています。

そして、必要に応じて多職種が連携

令和7年10月																										
交代時間 氏名		AM												PM												備考 使用フィクション
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
Aさん									本人訴え時トイレ誘導 (コンフォートプラス)																	
				4時			起床時												19時							
Bさん									訴え時トイレ誘導																	
							起床時		※夜間PTイレ使用											11時～15時(どこかで誘導)				寝る前		
Cさん				必ず確認																						
				3時～4時					9時～10時									15時～16時					22時			

お一人おひとりの排泄リズムに合わせて個別ケアパターンを組み、変化に応じて見直します

し、臨機応変なケアを提供しています。入居者様の仕草や表情、声の変化などに気を配りながら、一人ひとりの気持や状況に合わせた声がけをしたり、いつもと違う行動のときはなぜそのようなことをされるのかを探り、注意が必要などときにも穏やかに対応しておられます。「入居者様の声なき声を聞き、気持ちを含み取り、その方を知っていく。その積み重ねこそがスタッフが『安心できる馴染の存在』となる第一歩です」(原田施設長)

きのこ荘様が今後目指していくのは、入居者様の安心、快適を真ん中に据えたうえで「スタッフのみんなが、より楽しく介護にあたれる環境をつくること。現

やりがい重視の介護の楽しさを誇りをもって発信していく

「スタッフが自分が思っている以上に入居者様に向き合えていない様子が見てとれたり、伝えようとするものが伝わっていない感じがあたりと多くの発見があります。客観的に見るからこそ気づくことができます。自分自身で見て課題に気づき、座って話をするこの大切さを再確認し、互いに良い点、改善点を指摘し合うことで、ケア向上につなげていくのが目的です。人は目の前の現実には流されやすいもの。だからこそ、何度でも基本を繰り返して確認しあうことが大切だと感じます」(原田施設長)

毎年秋にはコミュニケーション研修も実施します。入居者様と研修を受けるスタッフがコミュニケーションを取っている様子を3分間ビデオ撮影し、入居者様の言葉を共感的な姿勢でしっかりと聞いているか、会話のできない入居者様との非言語コミュニケーションで相手に寄り添えているかなどを、指導するスタッフ、研修を受けるスタッフたちで映像を見て確認します。

きのこ荘様では、スタッフ研修にも力を入れています。新人研修についてはグループ全体の座学研修で理念をしっかりと伝え、介護の技術的な研修を行います。

グループ全体の核となるつながることを意識した研修

ケアに「これでいい」はない
常に見直し確認し続ける

Mina Tankar
私の思い


入居者様と共にあることがすべて
人生最後の時間が幸せであるように

認知症のある方を理解するためには
隣に座って一緒に過ごすこと

きのこ荘で新人研修を受けたとき、こんなに入居者様目線のケアが実現できると驚き、それまでの介護に対するイメージや常識が覆されました。入居者様と接するなかでも、日々気づきをいただいています。たとえば自分から見て「ちょっと困るな」と思う入居者様の行動にも、その方なりの意味があり、寄り添うことで思いを感じられます。

私たちが携わるのは、とても重い仕事であると同時に、人生の最後の時間を共にする、非常に意義深い仕事です。この方はここで幸せに過ごされたのか、自分は何をしてあげら

れたのか。常にそれを考え続けています。スタッフの目から見ても、きのこ荘は地域に必要とされていることを感じます。この先もスタッフが気持ちをひとつにしてより良いケアを目指します。



介護主任 原田真輔さん

Mina Tankar
私の思い


仕事を楽しみ、常に悔いのないように
できること、やるべきことをやり続ける

何ができるかを考えて実行できる
任せてもらえる環境がやりがい

「入居者様と一緒に楽しむ」ことが私のモットーです。今日お元気だった方が、明日私が出動したときに同じように元気でいらっしゃるとは限りません。人生の最後の瞬間は、いつ訪れるかわからない。実際に看取りの機会も多くあります。だからこそ、常に悔いが残らないケアができるよう、ご家族とのより良い関わり方を含めて日々勉強しています。

現場のスタッフを信頼し、やりたいことをやらせてくれるきのこ荘の環境に感謝しています。このなかで、笑顔であっても悲しみであっても、入居者

様に寄り添いながら共有したい。仕事仲間に対しても同じで、一緒に気持ちよく過ごしたい。すべての瞬間を大切にしたい。これからもやりがいあふれる仕事を楽しくしていきたいと思ひます。



ユニットリーダー 高橋三恵子さん

場のスタッフが楽しそうで、入居者様が穏やかに笑顔で生活すること」。その実現に向けて努力することがやりがいにもなっていると原田施設長。

なかでも、ケアで大切だと考えることをまとめた「きのこ荘17条憲法」はユニークな取り組みです。これはユニットリーダーへの研修の一環で、リーダー同士で大切なことを語り合いながら17項目を決め、一人ひとりがひと項目ずつ担当して言語化し、それをみんなに共有するというもの。「こうあるべき」を上層から説かれるのではなく、スタッフが理念を形にすることで、実践につながる真の意識の共有と徹底を図っています。

またSNSでの発信にも力を入れています。「介護業界では今後も『効率化』を重視する風潮が強まるでしょう。そのなかでも私たちは楽しさ、やりがいを大切にししていきたい。介護の魅力を発信したいし、自分たちが理念に基づいて実施しているケアを知っていただくことで、自信につながっていきたくて考えています。プランニングや他施設との差別化を意識しつつ、入居者様にとってのベストな介護のあり方を常に追求していきます」(原田施設長)。

イベント参加やSNSも駆使し地域にとって頼れる存在となる

木之子地区の一員として頼られる存在であるために

施設入居後も続く

自宅・ご家族とのつながり

きのこ荘様では、ユニットを入居者様とスタッフ様が共に過ごすひとつの家と

とらえています。そして、ご家族にとっては「離れ」のような関係性を目指しています。前出(3ページ)の入居時アセスメントに加えて、2020年からは、担当のケアマネジャーと介護士が入居者様と一緒にご自宅を訪問するカンファレンスを実施しています。

ご家族との信頼関係の構築に加え、ご自宅で生活していたときの様子などを知ることが目的です。

ご自宅での佇まいや行動から、その方の人物像がより鮮明になったり、ご家族の前での振る舞いから意外な一面を発見したり。「ご家族との距離も縮まる楽しい時間であり、より適切なケアを考える上で学びが多い取り組みです」(原田さん)。「ご家族もスタッフと話がしやすくなり、互いに要望を伝えやすくなるなど、多くのメリットがあります。スタッフが入居者様のご自宅でご本人やご家族と数時間過ごすことが基本ですが、なかには夕食にお呼ばれしたり、一緒に泊まつたりすることもあります。

数時間から一泊をご自宅で過ごしていただくことは、特別な帰宅イベントではなく、継続的な取り組みです。昨年は延べ101件の帰宅がありました。「家に帰って来られるんですね、と喜ばれるご家族も多く、この取り組みがあるからきのこ荘を選ぶというご家族もいらっしやいます」(原田施設長)。

入居者様は、きのこ荘様から外出して、散歩やドライブをしたり、広島市民球場で野球観戦を楽しんだりすることもあります。

「このような活動をスムーズに行える要因のひとつに、TENAを使用していることが挙げられます。公衆の多目的トイレでスムーズに交換できる仕様になっているので、外出時もおむつの交換場所

困りません。傍から見てもおむつが目立たず、臭いの漏れもないので、安心してお出かけを楽しめます」(高橋さん)。

地域との交流・連携やSNS発信で「きのこ荘ここにあり」を伝えたい

きのこ荘様が地域に溶け込んだ施設であることも、入居者様が地域へと外出しやすい理由です。地域担当スタッフがいて、地域のイベントに模擬店を出したり、子どもたちのイルミネーション企画と連動して施設をイルミネーションしたり。毎年秋に市内で開催される「かしコンテスト」では受賞の常連です。また「きのこ荘まつり」や「きのこ茶屋」など、施設主催の地域交流イベントも定期的に開催しています。

さらにSNSを活用した情報発信にも力を入れています。「施設にまつわる情報や報告に加え、きのこ荘のスタッフたちの取り組みも発信しています。スタッフが当たり前のように行っていることのなかに、素晴らしい取り組み、讃えられるべき頑張りがたくさんあるので、それを知っていただきたいと思っています」(原田施設長)。

これらの取り組みを通じて、幅広い年代の地域住民に知ってもらえるようになり、入居希望者の増加にもつながっています。

併設の小規模多機能型居宅介護事業所や認知症カフェなどと併せ、住み慣れた地域で、顔見知りのスタッフにケアを受けられること、ニーズやご要望に合わせた介護や支援を提供することで「いざとなったとき、自分が暮らす地域にはきのこグループがあるという安心感をもっていただける、頼れる存在であり続けた」と考えています(原田施設長)。

やりがいをお客様と共有するため必要な情報を的確にお伝えしたい

ユニ・チャームメンリック株式会社
営業本部 西日本第1営業部 TENAアドバイザー
藤本 佳苗さん

TENA
アドバイザー
インタビュー



原田まゆみ施設長(左)はじめスタッフの皆さんと。
写真右端が藤本さん

なにより大切なのは、施設スタッフの皆様とのコミュニケーションです。ご意見や悩みごとをしっかりと汲み取り、課題も含めて共有いただける存在になりたいと思っています。お客様がより適切なケア方法を考えるときに、私も同僚のように一緒に悩んだり、解決方法を考えたりする存在でありたいと願っています。そのため、訪問先でうかがった内容や自分の感じたことなどはその都度記録に残すようにしています。現場の確認だけでなく将来に向けた課題の共有、製品に対する要望の変化を自分なりに整理できるメリットがあります。時間を置いた訪問でも「あの件はどうな

りましたか?」と話題を継続させられるのもとてもあり、効率的にコミュニケーションを深めるためのツールであり、現場の皆さまの真摯な取り組みを、客観的に伝える「証」でもありたいと思っています。

この仕事をしていておもしろいと思うのは、排泄に関するさまざまなエビデンスは、自分の体で考えてもかなり当てはまることです。数値をケアに当てはめてお客様のお困りごとを改善しようとしたとき、知り得た知識をもとに提案・検証して、それが実際に当てはまったときにはとてもやりがいを感じます。

世界の風

Nr.3

スウェーデンと日本、 中から見て考える 介護の現場(2)

母国スウェーデンと日本を行き来しながら
福祉の研究、介護の実践を続け、
日本にスウェーデン流介護を広めた
グスタフ・ストランデルさん。
今号では、日本で発展したケアが
世界に与えた影響と、
ディグニティー（尊厳）を大事にする
ケアの未来について語っていただきます。

v ä r l d e n s
v i n d a r



グスタフ・ストランデル／1974年生まれ。武蔵野大学ウェルビーイング学部教授。専門は、高齢者福祉、介護学。日本とスウェーデンのほか、世界各国の介護事情に精通している

理念のもとに実践し システムを確立させた日本

日本では「スウェーデンは福祉大国」という言葉を聞きます。けれど、スウェーデンから来た私の目には、日本の福祉、特に地域包括ケアの実践力は素晴らしいと感じます。

スウェーデンから学んだ日本で、最初はそれぞれの施設や介護者独自の取り組みとして施設の個室化や個別ケアが始まり、それが介護保険などのシステム化につながっていきました。しかも30年ほどのスピードで介護施設の環境を変えらるというのは、世界でも例のないことで、その素晴らしいさを日本の人たちに知ってほしい、忘れないでほしいと前回お伝えしました。

北欧諸国では、施設で暮らす認知症の人も、街の中を自由に歩いています。ひとりの人間として地域に暮らす一員で、地域から隔離するのではなく、みんなで守りましょ

うという考え方です。

日本でも認知症発症後、ある段階まではケアを受けながら地域の中で暮らしています。それは以前から当たり前だったのではなく、「そうしたい」と思った人たちが頑張ってきた結果、行政や国が動いてシステムがつけられたのです。介護保険だけでなく、たとえば厚生労働省の認知症対策の二環で始まった「認知症カフェ」や「認知症本人ワーキンググループ」など、より良いケアをめざす人たちが全国組織をつくって活発に活動しています。

先に理念があつて、それに基づき実践があり、そこからメソッドが確立され法律が変わっていった。それこそが人口1億2000万人超の日本で、30年ほどという短期間に地域包括ケアシステムを機能させられた理由だと考えます。

高齢化社会は世界的な課題 対応する国際基準の開発

少子高齢化は世界中、特に先進国にとって大きな課題です。そうした状況に対応するため、各国の専門家が集まって、認知症包括ケアや介護者を含む組織のあり方に関する国際基準の策定が2018年から進められています。私はその会議に日本代表として参加しています。最初の会議がロンドンで開催



高齢社会に関する国際基準の策定会議メンバー(ISO/TC314)
2025年6月に韓国で行われた会議には、オンラインも含めて数十カ
国の代表が参加しました

されたとき、イギリス代表は冒頭のあいさつで「今、日本の地域包括ケアを勉強しています」とあいさつしたのを聞き、大きな喜びを感じました。現在策定中のガイドラインにはもちろん、日本の包括ケアのエッセンスがたっぷり盛り込まれており、「認知症カフェ」や「認知症本人ワーキンググループ」などの成功事例も紹介されています。

しかし、日本国内ではあまり活用が進んでいません。理由のひとつは、日本ではすでに地域包括ケアのシステムにのっとって現場が動いているから。そしてもうひとつは、チェックリストの存在です。

国際基準にはチェックリストが必須になります。けれど、リストがあると、それに照らし合わせて「できていること」「できていないこと」がはっきり示され

てしまいます。現場や地域の状況で必要でない項目であっても、リスト上では「できていない」ということになる。だから取り入れにくいという事情があります。日本では福祉に関するローカルな条例がたくさんあります。各地域で認知症に関わる人々にとって必要なことや課題を洗い出し、どうするかを話し合い、条例をつくって実践しています。従って、基準に合わないから、「出来ていない」という訳ではありません。とはいえ、基準は無視してよいものでもありません。基準に照らし合わせ、確認しながら自分たちに必要なものを生み出していく。そうして初めて自分たちのやり方や特徴を客観的に評価できるのです。

ディグニティー(尊厳)が ケアの現場を変える

日本のケアシステムの素晴らしい点は、そこに関わる多くの人々が「いいことをしよう」としていることです。地域の中で要介護者が暮らせるよう、優れたシステムを各地で実現しようとしている。ただし今後は、特に地方では財源問題、都会では人材不足解決の見通しが立たなくなると危惧されています。要介護者は増え続け、労働人口は減り続ける。そこに万能的解決策は見つけられませんが、ケア

の基盤として、常にディグニティー(尊厳)を大事にすることが欠かせないと考えます。生き生きと格好良く生きている人の尊厳を認めることは難しくありません。

容易でないのは、問題や痛みを抱えている人、ウェルビーイングの状態でない人の尊厳を認めることです。相手へのより深い理解が必要であり、介護の現場ではそれが求められます。

「早く死にたい」「ケアなんていらない、放っておいてほしい」と要介護者に言われることもあるでしょう。それに対して「死にたいのならケアする意味がない」「やりがいがない」と感じてしまうことがあるかもしれません。

でも「死にたい」は、本人が「生きている意味がない」と感じてしまっている状態だということ。介護のプロフェッショナルとして、生きる意味と一緒に見出すことができれば、要介護者だけでなく、介護する側も変わります。

「死にたい」人が「生きていてよかった」と心情を変化させることで、家族と仲直りしたり、できなかったことができるようになったりする例をたくさん見てきました。決してあきらめることはありません。考えを変えるためには、本人がそう考えている理由に、

本人や家族とプロフェッショナルなチームが深いコミュニケーションをとりながら向きあっているかなければなりません。そうした取り組みの積み重ねが尊厳を大切にしたケアにつながるのです。

ディグニティーとQOL TENAで排泄ケアを変えたい

こういった話は、ともすれば理念的、哲学的になっていきます。理念も大切ですが、具体例の積み重ねがもっと大事です。理念と具体策を両立する排泄ケアを提供できるTENAには大いに期待しています。

排泄ケアは人の尊厳を守り、その人らしい生活を維持する上でとても重要です。毎日、1日中必要な基本的ケアなので、うまくいかないと他のこともうまくいかなくなります。尊厳を守るためにも生活の質(QOL)を向上させるためにも非常に大切なものです。

排泄を誰かに頼っていた人が、より自分に合ったパンツやおむつを自分で使えるようになる。それは本人の自信となり、その元気になった姿が家族を喜ばせることにもつながります。

TENAの奥深い理念と、細やかな具体策がグローバルスタンダードになることで、世界の排泄ケアの質が向上することを願います。

おねがいごと

たかいひろこ



コラム



こんなときどうする？

ナッピー先生のレクチャータイム

“スキンケアは予防的に”

刺激を避け、適切なケア用品を選ぼう

皮膚ケアの始まりは観察から

皮膚トラブルは快適な生活を損ねる大きな要因のひとつ。トラブルを起こさない予防が第一じゃが、次に悪化させないことがポイント。そのためには早期発見が重要じゃ。パッド交換時や入浴時は皮膚観察のチャンス。毎日のケアプランに組み込んで、仕組みとして肌の観察をするといいじゃろう。

チームプレーも大切

肌にやさしいスキンケアは、介護スタッフ、医療スタッフ、栄養士、ケアマネージャーや事務スタッフなどの連携で効果が高まる。一人ひとりの肌の状態に合わせた日々のケアの中で、小さなトラブルを見逃すことなく必要に応じて医療スタッフに報告しよう。栄養状態も肌に関わるので何をどれだけ食べているのかもチェックじゃぞ。

適切なケア用品で質の高いケアを

尿や便が肌に触れている時間が長いほど、肌への負担になる。また洗浄や清拭時の摩擦、洗浄剤なども皮膚炎の原因になりやすい。パッドなどのケア製品の選び方、交換のタイミングや交換の仕方を適切にしたうえで、肌のダメージを軽減するスキンケアクリームなどを使用するのがおすすめじゃ。

『ナッピー先生と学ぶ大人のおむつ読本』

コンチネンスケアの基本を漫画とコラムでわかりやすく紹介。介護や看護に携わっている方はもちろん、尿漏れが気になる方にも役立つ情報が満載です。Amazonや楽天でご購入いただけます。

・電子版：880円、
・ペーパーバック版990円
(ともに税込み)



製品のご紹介

皮膚保護クリーム『TENAバリアクリーム』 冬の乾燥からお肌を守りませんか？

- お肌の表面に撥水効果のある薄い膜を作り、お肌の乾燥を防ぎます
- 薄い膜が、尿・便・汗・パッドとの摩擦などの外的刺激からお肌を守ります
- クリームが透明なので、お肌の状態を確認しながらケアにあたっていただけます
- 皮膚呼吸を妨げないので、蒸れにくく快適にお過ごしいただけます
- 保存料なし・無香料のため、よりシンプルな製品をお探しの方におすすめです

ご使用場面

- 冬の乾燥でお肌がカサカサにならないよう、ひじ・ひざ・かかと・すねに
- 排泄物の汚れがつきやすく、外部刺激から守りたいときに
- おむつやパッドの摩擦からお肌を守りたいときに



撥水イメージ



内容量：150ml



皮膚科学的テスト実施済み



スキンヘルスケアアライアンスによる認証

Mild Vind
2025.12 Nr. 4

- P2：きのこ荘様
- P6：世界の風 Nr.3
- P8：4コマ漫画

コラム

製品のご紹介

Mild Vind(ミルヴィン)は、スウェーデン語で「やさしい風」の意味です。

バックナンバーはこちら

オンラインTENAアカデミー
<https://tena-academy.jp>

